

全学FD2012
中教審委員 金子元久先生と語ろう

報告書

実施期日：2012年10月24日(水)

開催場所：共通教育棟（主会場D21）

富山大学大学教育支援センター

はじめに

本報告書は、平成24年10月24日に開催された、富山大学全学FD研修会『全学FD2012—中教審委員 金子元久先生と語ろう—』の概要をまとめたもので、基調講演資料、参加者の討議（グループディスカッションⅠⅡ、全体共有ディスカッションⅠⅡ）の一部、アンケート結果などを収録したものです。

本学では、大学教育支援センターにFD部門を設置し、各学部との連携を有機的に推進するためのFDタスクチームを軸に、全学的なFD活動を展開していますが、今回の全学FD研修会は、部門長の橋本勝教授を企画責任者として、これまで試みたことのない新しい形で実施しました。学生を含む全構成員参加の討議型FDです。詳細は、巻末の「結びに変えて」（橋本部門長）をご覧ください。

FDの義務化から4年が経過し、平成24年8月28日の中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』では、「学生の主体的な学びの確立」と「学修の質保証」が求められ、「今後の具体的な改革方策」として「速やかに取り組むことが求められる事項」に、「全学的な改革サイクルの確立のため、ワークショップを中心に「プログラムとしての学士課程教育」という基本的な認識の共有や教育方法に関する技術の向上に資する充実したFDを実施する。そのために専門家（ファカルティ・ディベロッパー）の養成や確保、活用を図る」ことが掲げられています。

これまでも各部署で活発に展開しているFD活動とは別に、今回企画立案した全学FD研修会はささやかな試みかもしれませんが、大きな一歩になるものと考えております。この報告書では、ディスカッションの全てを記録することはできませんでしたが、今後の全学FDの展開に資するものであると思います。

今回のFD研修会の趣旨をご理解いただき、基調講演を快くお引き受けいただいた、金子元久先生には改めて厚く御礼申し上げます。基調講演では、日本の大学生の学修時間の少なさを指摘しながら、今日の大学が社会的責務として教育機能を充実させるべき状況にあることを強調され、参加型授業の充実の方策を着実に推し進める必要があることなどを概説していただき、その後に展開されたグループ討議や全体討議を活発に進める糸口を与えて下さいました。基調講演や討議の様子は本報告書の要約部分をご参照下さい。

最後になりましたが、富山大学及び参加者全員にとって実りある有意義なFD研修会になり、実行委員としてご尽力いただいたFDタスクチーム各位、ご参加いただいた教職員、学生の皆さんにも厚くお礼を申し上げます。

理事（教育担当）・副学長
大学教育支援センター長 山口 幸祐

【当日の内容】

- 13：30～13：35 開会の挨拶…山口センター長
- 13：35～13：40 趣旨説明 …橋本FD部門長
- 13：40～14：40 基調講演
中教審委員、東京大学名誉教授、現筑波大学教授 金子元久氏
講演タイトル:大学教育改革の展望
- 14：40～14：50 移動・小休憩
- 14：50～15：20 グループディスカッションⅠ（約30分）
グループは教員、職員、学生別
※事前の申し込みを基に、教員6グループ、職員2グループ、学生1グループを構成し、FDタスクチームのメンバーが進行マニュアルを利用して各グループのファシリテーターを務めて進行した。(学生グループはUD Matesのメンバーがファシリテーター)
自己紹介と基調講演に対する簡単な討議
グループとしての質問票の作成
- 15：20～15：30 移動・小休憩
- 15：30～16：10 全体共有Ⅰ：金子氏との質疑応答
※金子氏に質問票を5つ程度選んでもらい金子氏に回答してもらった上で、必要に応じて金子氏にさらに質問するという形を取ました。
- 16：10～16：20 移動・小休憩
- 16：20～16：50 グループディスカッションⅡ（約30分）
※金子報告を受けて、富山大学としてどう行動すべきかについてグループで討議し、グループとしての主張を報告票にまとめ提出してもらいました。金子氏には適宜、グループディスカッションの様子を覗いてもらいました。
- 16：50～17：00 移動・小休憩
- 17：00～17：20 全体共有Ⅱ：金子氏からのコメント
※提出された報告票の中から金子氏に3つほど選んでもらい、金子氏からのコメントを受けて、若干の討議をしました。
- 17：20～17：25 閉会の挨拶：佐藤副センター長
- 17：25～17：30 アンケート記入

参加者一覧

●…グループ討議のファシリテーター

教員参加者

No.	職名	氏名（フリガナ）	備考
1	学長	遠藤 俊郎（エンドウ シュンロウ）	基調講演のみ
2	理事・副学長、 大学教育支援センター長	山口 幸祐（ヤマグチ コウスケ）	
3	副学長	西川 友之（ニシカワ トモユキ）	基調講演のみ
4	人文学部教授	佐藤 裕（サトウ ユタカ）●	
5	人文学部教授	鈴木 信昭（スズキ ノブアキ）	基調講演のみ
6	人文学部教授	末岡 宏（スエオカ ヒロシ）	基調講演のみ
7	人文学部准教授	藤本 武（フジモト タケシ）	
8	人文学部准教授	恒川 正巳（ツネカワ マサミ）●	
9	人間発達科学部教授	川崎 聡大（カワサキ アキヒロ） ●	
10	人間発達科学部教授	千田 恭子（センダ キョウコ）	基調講演のみ
11	人間発達科学部准教授	高橋 満彦（タカハシ ミツヒコ）	基調講演のみ
12	人間発達科学部准教授	野田 秀孝（ノダ ヒデタカ）	
13	経済学部教授	中出 孝典（ナカデ タカノリ）●	
14	経済学部教授	新里 泰孝（ニイサト ヤスタカ）	基調講演のみ
15	経済学部准教授	平井 俊行（ヒライ トシユキ）	
16	経済学部准教授	真部 典久（マナベ ノリヒサ）	基調講演のみ
17	理工学研究部(理学)教授	若杉 達也（ワカスギ タツヤ）●	

18	理工学研究部(理学)教授	森脇 喜紀(モリワキ ヨシキ)	
19	理工学研究部(理学)教授	濱名 正道(ハマナ マサミチ)	
20	理工学研究部(理学)教授	柘植 清志(ツゲ キヨシ)	
21	理工学研究部(理学) 准教授	出口 英生(デグチ ヒデオ)	基調講演のみ
22	理工学研究部(理学) 准教授	唐原 一郎(カラハラ イチロウ)	
23	理工学研究部(理学) 准教授	波多 宣子(ハタ ノリコ)	
24	大学院医学薬学研究部 (薬学) 教授	新田 淳美 (ニッタ アツミ)	
25	大学院医学薬学研究部 (医学部) 助教	山口 容子 (ヤマグチ ヨウコ)	
26	医学部看護学科助教	野上 睦美 (ノガミ ムツミ)	
27	理工学研究部(工学)教授	松田 健二 (マツダ ケンジ)	基調講演のみ
28	芸術文化学部教授	武山 良三 (タケヤマ リョウゾウ)	
29	芸術文化学部教授	小林 和子 (コバヤシ カズコ)	
30	芸術文化学部教授	山田 眞一 (ヤマダ シンイチ) ●	
31	芸術文化学部教授	長山 信一 (ナガヤマ シンイチ)	
32	芸術文化学部講師	深谷 公宣 (フカヤ キミノリ)	
33	芸術文化学部助教	福本 まあや (フクモト マアヤ)	
34	アドミッションセンター 入試情報広報室長入試方 法研究開発室長特命教授	船橋 伸一 (フナバシ シンイチ)	

職員参加者

No.	職 名	氏名 (フリガナ)	備 考
1	人文系支援グループ 主査	城村 浩司 (ジョウムラ ヒロシ)	
2	人間発達系支援グループ 主査	田中 茂 (タナカ シゲル)	
3	人間発達系支援グループ 主任	浦島 布美子 (ウラシマ フミコ)	
4	経済系支援グループ 主幹	小林 司 (コバヤシ ツカサ)	基調講演のみ
5	経済系支援グループ 主任	石崎 健生 (イシザキ タケオ)	基調講演のみ
6	経済系支援グループ 主査	高尾 邦彦 (タカオ クニヒコ)	基調講演のみ
7	理学系支援グループ 主幹	飯野 るみ子 (イイノ ルミコ)	基調講演のみ
8	理学系支援グループ 主任	鳥海 衣美子 (トリウミ エミコ)	基調講演のみ
9	工学系支援グループ 事務職員	武田 けい (タケダ ケイ)	基調講演のみ
10	芸術文化系支援グループ 学務チーム主幹	山田 豊 (ヤマダ ユタカ) ●	
11	芸術文化系支援グループ 学務チーム主査	竹田 充輝 (タケダ ミツテル)	
12	学務部長	彦坂 伸一 (ヒコサカ シンイチ)	基調講演のみ
13	学務部 学務グループ長	大野 昭彦 (オオノ アキヒコ) ●	
14	学務部 学務グループ主幹	出村 昭宏 (デムラ アキヒロ)	
15	学務部 学務グループ主幹	波間 雄司 (ハマ ユウジ)	
16	学務部 学生支援グループ長	寺林 忠男 (テラバヤシ タダオ)	基調講演のみ

17	学務部 学生支援グループ主幹	新井 健二 (アライ ケンジ)	基調講演のみ
18	学務部学生支援グループ 事務職員	大岩 菜菜恵 (オオイワ ナナエ)	
19	学務部学生支援グループ 事務職員	豊本 光世 (トヨモト ミツヨ)	
20	学務部 入試グループ長	橘 幹宏 (タチバナ ミキヒロ)	基調講演のみ
21	学務部 入試グループ主任	横山 雅彦 (ヨコヤマ マサヒコ)	基調講演のみ
22	学務部 就職支援グループ長	田中 輝和 (タナカ テルカズ)	基調講演のみ
23	学務部 就職支援グループ主幹	島田 勝弘 (シマダ カツヒロ)	基調講演のみ

学生参加者

No.	学部等	氏名 (フリガナ)	備考
1	人文学部 3年	高藤 実代	
2	人文学部 1年	石原 由加利	
3	人間発達科学部 2年	加賀見 尚子 ●	
4	人間発達科学部 2年	不破 有貴	

全体の進行・総括及び総務としての参加者

- ・橋本 勝(大学教育支援センター)
- ・新井 浩(学務グループ 学務企画チーム)
- ・三浦 則枝(学務グループ 学務企画チーム)

教員 35名 (内訳：基調講演のみ出席10名、基調講演・グループディスカッション参加24名、進行統括1名)

職員 25名 (内訳：基調講演のみ出席12名、基調講演・グループディスカッション参加11名、総務2名)

学生 4名 (内訳：基調講演・グループディスカッション参加4名)

計64名参加

基調講演

大学教育改革の展望

中央教育審議会委員
東京大学名誉教授
筑波大学 大学研究センター教授

金子元久先生

【御略歴】

- ・ 東京大学教育学部卒、同大学院教育学研究科修士、シカゴ大学Ph. D.
- ・ アジア経済研究所員、ニューヨーク州立大学アルバニー校客員助教授、世界銀行コンサルタント、広島大学助教授、東京大学助教授、同教授、同大学院教育学研究科長・教育学部長、国立大学財務経営センター研究部長を経て現職。東京大学名誉教授。
- ・ 中央教育審議会委員、日本学術会議会員、日本高等教育学会長
- ・ 代表的著書：『大学の教育力』、筑摩書房、2007年9月





大学教育改革の展望

金子元久

富山大学
2012年10月24日

大学教育とは何か

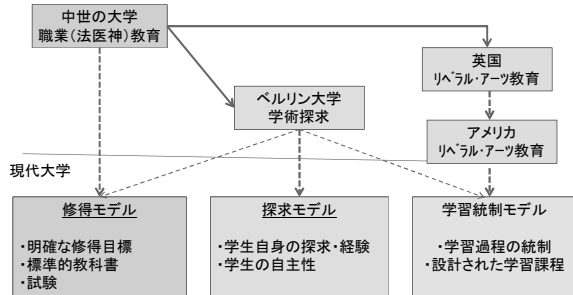
▶ 大学教育— 三つの源流

- ▶ 職業教育 — 中世ヨーロッパの大学 法・医・神
- ▶ リベラルアーツ — イギリスで発達
- ▶ 学術志向 — 1810年ベルリン大学「フンボルト理念」

	A. 高度職業教育	B. リベラル・アーツ	C. 学術志向
目的・機能	高度職業人の養成	富裕階級の子弟の育成	研究者、官僚の養成
知識・内容	職業知識	古典	学術的知識
教育・学習の接点	講義による解説 試験	対話 学習過程の統制	「学習の自由」 講義による触発 探究への参加 ゼミナール

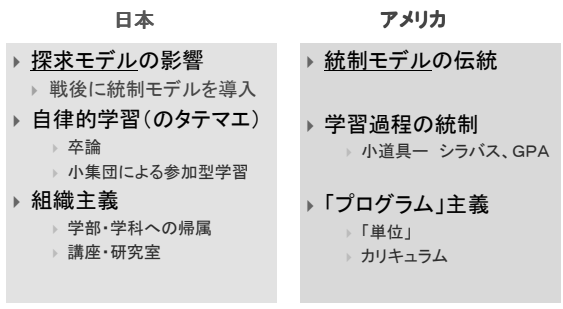
大学教育の基本モデル

▶ 中世大学から現代へ



▶ 3

大学教育の日本的特質



▶

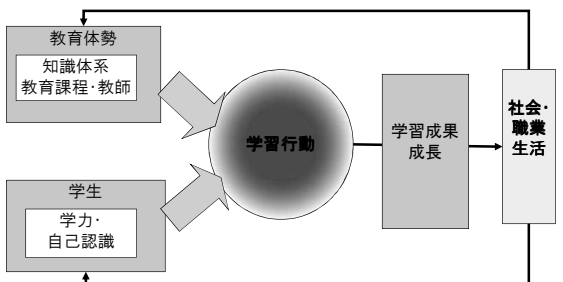
発表の構成



1. 学習の量と質
2. なぜ自律的学習か
3. 学習を引き出す授業改革の展望

大学教育のなりたち

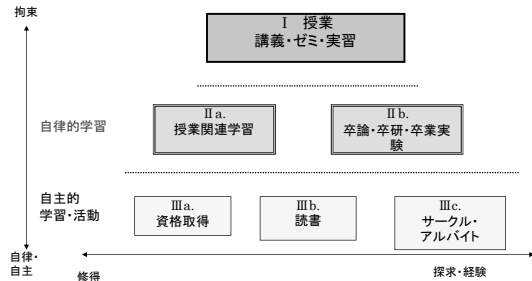
▶ 焦点としての学習行動



▶ 6

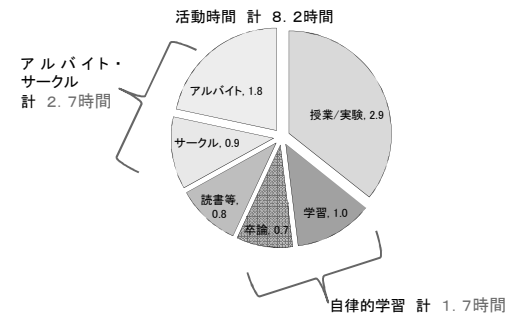
学習時間

▶ 重層的な構造



▶ 7

日本の学生の学習時間



▶ 8

データ: 東京大学 大学経営政策研究センター(CRUMP)『全国大学生調査』2006-8年、サンプル数44,905人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

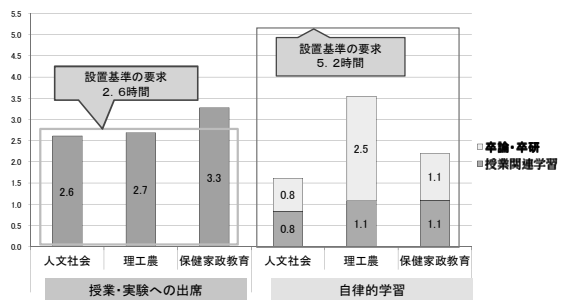
大学設置基準の想定

▶ 卒業要件

- ▶ 計124単位
 - ▶ 1単位 = (授業1時間+関連する学習2時間) * 15週
 - ▶ 一学期で修得するべき単位
 - ▶ 124単位 ÷ 4年間 ÷ 2学期 = 16単位
 - ▶ 一週間の学習時間 16単位 × 3時間 = 48時間
 - ▶ 5日間とすると 48時間 ÷ 6日 = 8時間
- ▶ 一日の学習時間計 8時間 → 「フルタイム」学生
 - ▶ アメリカの要求は日本と同じ
 - ▶ ヨーロッパ (ECTS) も一日8時間
 - ▶ 日本の学生は フルタイム学生ではない

▶ 9

自律的な学習時間が不足

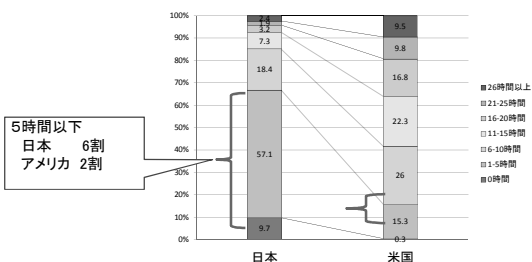


▶ 10

アメリカと比べると差が明確

▶ 一週間の授業関連の学習時間 日本と米国

▶ 1-3年生の平均



▶ 11

データ: 日本 前掲と同じ、アメリカ NSSE


日本型学習の特徴

- ▶ 自律的な学習時間が少ない
 - ▶ 授業への出席はしている
 - ▶ 授業に関連した学習時間が少ない
- ▶ 卒業論文・実験等に重点
 - ▶ 4年生に集中
 - ▶ 1年生から3年生までの積み上げは少ない
- ▶ ゼミ・研究室での活動に力点
 - ▶ 集団での学習
 - ▶ ただし、自律的な学習につながっているかは疑問

授業と自律的学習とが分離

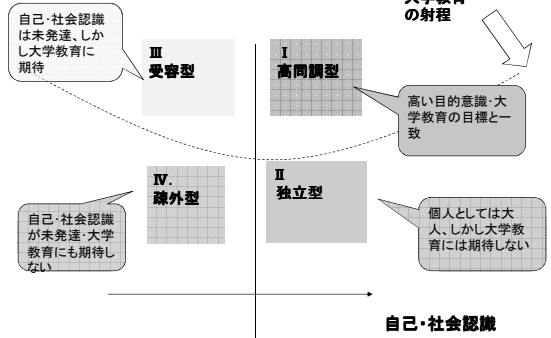
▶ 12

発表の構成



1. 学習の量と質
2. なぜ自立的学習か
3. 学習を引き出す授業改革の展望

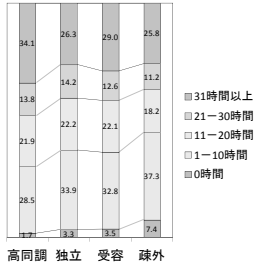
学生のモチベーション



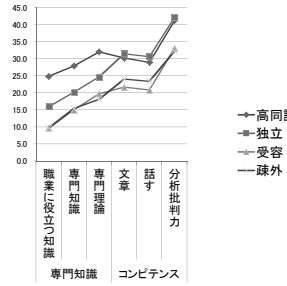
14

自己認識は学習時間、自信につながる

▶ 週あたり学習時間



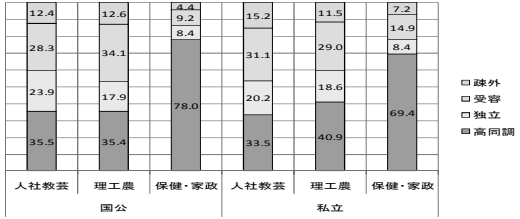
▶ 能力の自己評価



15

高同調は3分の1

▶ 多様な学生に
▶ 学習への契機を与える授業が必要




データ: 東京大学 大学経営政策研究センター (CRUMP) 『全国大学生調査』2006-8年、サンプル数44,905人
http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/

16

大学教育としごと

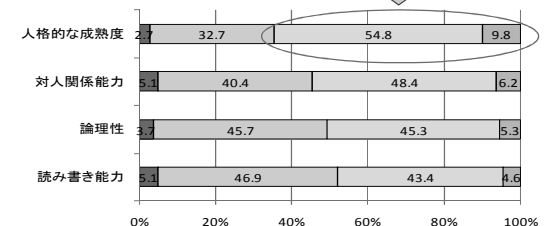
▶ 三つの層



17

人事担当者の、大卒に対する評価

▶ コンピテンスよりも、人格的な成熟度に問題

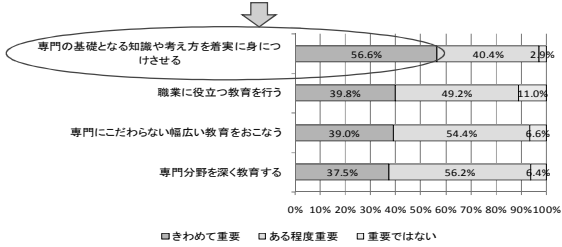


東京大学 大学経営政策研究センター (CRUMP) 『大学教育に関する人事担当者調査』2009、回答者数 8,157 http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/

18

社会人が望む大学教育

▶ 考え方の軸 ・ 修得したことによる自信



▶ 19

東京大学大学経営政策研究センター (CRUMP) 『大学教育に関する職業人調査』
2009、回答者数 25,203人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

職業との関係の再構築

▶ 三つの伝統的な考え方

- ▶ 実用的な職業教育、教養教育、専門教育
- ▶ 特定分野では大学教育と職業が直結
- ▶ 多くの分野では、直接には職業に結びつかない

▶ 今、もっとも支持の高いもの

- ▶ 専門の基礎となる知識や考え方を
- ▶ を着実に身につけさせる

▶ 何を意味するか

- ▶ 体得の経験、それによる人格的な統一性が要求される

自律的に学習、探求、経験することが不可欠

▶ 20

発表の構成

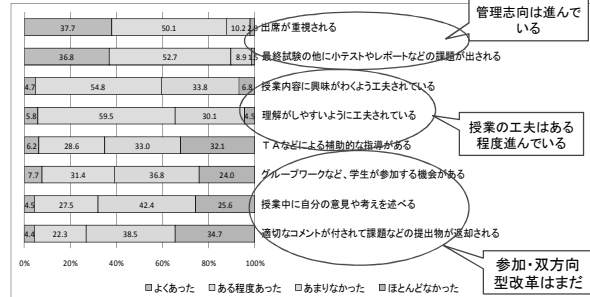


1. 学習の量と質
2. なぜ自律的学習か
3. 学習を引き出す授業
改革の展望

▶ 23

授業方法の改革の現状

▶ 学生が経験した授業



▶ 22

出所: 東京大学大学経営政策研究センター (CRUMP) 『全国大学生調査』 回答者 44,905人

授業方法によって学習時間は変わる

▶ 誘導型、参加型授業は、自律的学習時間を増やす

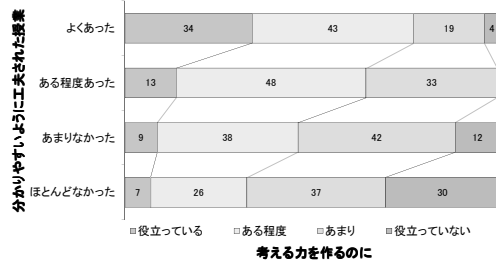
授業方法	学生タイプ			
	高同調	独立	受容	疎外
統制型				
出席重視	-0.7			-0.7
小テスト・レポート	0.4	0.5	0.6	
理解しやすい工夫	0.7	0.3	0.4	0.6
誘導型				
興味わく工夫	0.9	0.4	0.7	0.8
TAなどの補助	1.1	0.8	0.9	1.0
参加型				
グループワーク	0.9	0.7	0.9	1.4
授業中に意見を述べる	1.1	0.9	0.7	1.2
課題へのコメント	1.8	1.4	1.2	1.6

帰係数(標準化、%) 有意率99%以上飲み表示。
出所: CRUMP 全国大学生調査から算出

▶ 23

授業方法はコンピテンスとも関わる

- 「わかりやすく工夫された授業」が多いほど、
「授業は分析的・批判的に考える力」を作るのに役立つと感じる

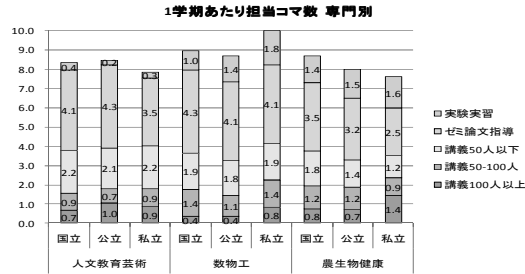


▶ 24

データ: 前と同じ

教員の担当コマ数

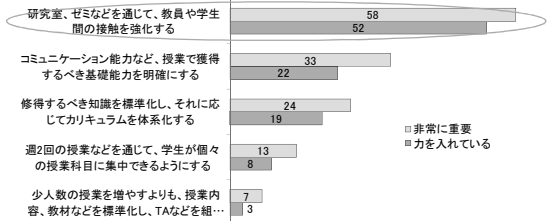
- ▶ 日本の特質 一人あたり担当コマ数が多い
- ▶ ほぼ8コマ、アメリカは4コマ程度



▶ 25

教員の授業に対する志向

- ▶ 人間的な接触をもっとも重視
- ▶ 自律的な学習とはつながらない

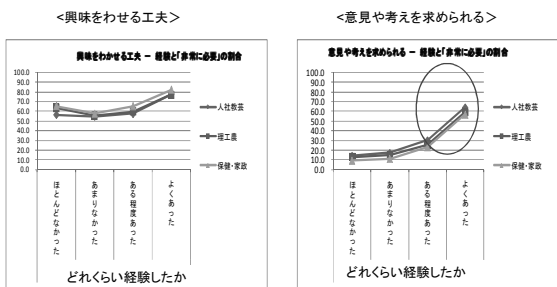


出所: CRUMP『全国大学教員調査』2000、N=5192

▶ 26

参加型授業は慣れが必要

- ▶ 学生が「非常に必要」だと思う割合



▶ 27 データ: CRUMP『全国大学生調査』2006-8年、サンプル数44,905人、<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/>

日本の大学教育の特徴

- ▶ 大学
 - ▶ 基本的に学術研究の枠組(学部・学科)で組織
 - ▶ 教員
 - ▶ 担当コマ数が多い
 - ▶ 時間はあまり使わない
 - ▶ インフォーマルな教育課程に依拠
 - ▶ 学生
 - ▶ 授業は出ている
 - ▶ 自分での勉強は少ない
- ➔
- ▶ 利点
 - ▶ 学生の選択が許される
 - ▶ やる気があれば勉強
 - ▶ 集団によるサポート
 - ▶ 退学率は低い
 - ▶ 欠陥
 - ▶ 特徴個々の授業の中身が薄い
 - ▶ 体系的な知識の修得が不完全
 - ▶ 教育成果の実感がない・自己認識が浅いまま

▶

改革の展望 —なぜ改革が必要か

- ▶ これまでの社会
 - ▶ 製造業を中心とする大組織、職場組織による知識伝達、企業間の安定した関係
 - ▶ これに大学教育は対応していた
- ▶ これからの社会
 - ▶ 高い流動性、非安定性
 - ▶ 個人としての判断、新しい分野の発見の必要
 - ▶ 一人ひとりが考え、学習していく
- ▶ そこで必要とされる能力
 - ▶ 独自に考え、学習する。
 - ▶ 自分自身が何を必要としているか、の自覚
- ▶ そうした能力を作る大学教育

▶ 29

政策の動向

- ▶ 2008年
 - ▶ 中央教育審議会 2008年(答申)「学士課程教育の構築に向けて」
- ▶ 2012年
 - ▶ 3月 経済同友会『私立大学におけるガバナンス改革—高等教育の質の向上を目指して—』
 - ▶ 6月 国家戦略会議『社会の期待にこたえる教育改革の推進』同『グローバル人材育成戦略』
 - ▶ 6月 民主党『大学改革ワーキングチーム報告書』
 - ▶ 6月 文科省『大学改革実行プラン—社会の変革のエンジンとなる大学づくり』
 - ▶ 8月 中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」

▶ 30

改革の展望

▶ 今回の中教審答申のポイント

- ▶ ① 学生の自律的学習が足りない
- ▶ ② 密度の薄い授業が一般化している
- ▶ (③ 基本的な理念と、組織の再考が必要)

▶ 次の課題 — ③の検討

- ▶ 授業の位置づけについての基本的な考え方の再検討
- ▶ 大学の教育ガバナンスの改革
- ▶ しかし、政策にできることは限られている

▶ 改革の展望

- ▶ 一般的な正解はない 大学によって状況は違う
 - ▶ 大学が自ら模索することが不可欠
-

▶ 31



ご質問、ご意見をどうぞ

【基調講演要旨】（要約は経済学部 中出教授）

1 学習の量と質

日本の学生の自律的学習は、1日当たり約1.7時間と少ない。一週間の授業関連の学習時間をみると、5時間以下は日本6割、アメリカ2割である。このように、日本の学生は、授業に出席するものの、授業に関連した学習時間が少ない。日本の学生は、ゼミ・研究室での活動に力点を置くが、これが自律的学習につながっているかは疑問である。

2 なぜ自律的学習か

将来何がしたいかはっきりしているという自己・社会認識をもつ学生ほど学習時間が長くなり、自己の能力に自信を持つ。しかし、このような自己・社会認識をもち大学教育の目標と一致する高同調型の学生は3分の1程度しかいない。

ところで、企業の人事担当者は、大卒について、コミュニケーション能力といったコンピテンスよりも人格的な成熟度に問題があると認識している。また、社会人は大学教育に、「専門の基礎となる知識や考え方を身に着けさせること」を最も望んでいる。これは、専門分野の細かいことではなく、論理の体系である。これを身に着けるには知識がなぜ必要か納得する必要がある（体得の経験）。そのためには、自律的に学習、探究、経験することが不可欠である。

3 学習を引き出す授業

授業の工夫（誘導型）はある程度進んでいるが、参加・双方向型改革はまだ行われていない。誘導型授業は自律的学習時間を増やす効果を持ち、参加型授業はこれより効果的である。特に、学生が提出した課題にコメントを付けて返却することはもっとも効果的である。「わかりやすく工夫された授業」が多いほど、学生は「授業は分析的・批判的に考える力」を作るのに役立つと感じる。

日本の教員は、担当コマ数がアメリカより多く、ゼミや研究室を通じた学生との人間的な接触をもっとも重視している。しかし、これは自律的学習とはつながらない。

しかし、参加型授業には学生の慣れが必要である。つまり、学生は参加型授業に慣れてくると、参加型授業を必要と認識するようになる。

【全体共有Ⅰ】(要約は芸術文化学部 山田教授)

1. 学生グループからの質問

Q:金子先生にとって、大学で授業をする意味はなにか。

A:ふたつある。ひとつは、大学全体のカリキュラムの中で与えられた科目を分担すること。もうひとつは、授業を通して自分が大事だと思うことを学生に伝えていくこと。インフォーマルにさまざまなことを行う中で、学生に影響を与えること。

これに関連して、「授業はだれが所有しているのか」という問題がある。これまでは、授業は教員が所有しているという考え方が強かったが、それでタフな時代を生きぬく力を学生が身に着けていけるかどうかは問題。大学全体として、カリキュラムを設計し、教員が分担していくという考えが必要。

2. 教員グループからの質問

Q:自律的学習はどうやって進めていくのか。

A:教員が課題を決めるというやり方と、学生が自主的に課題を決める、というやり方がある。大事なことは、学生に提出物を出させたら必ずコメントをつけて学生に返すこと。参加型学習になれていない学生を対象にした場合、いわゆる参加型の授業はうまくいかない。どこに着地点があるのかははっきりしていない参加型授業には問題がある。教員同士相互に授業を見合って、実験、試行錯誤していくことが大事。参加型授業にはさまざまな形態があり、グループ討議だけが参加型授業ではない。提出物に対してコメントをつけて返したり、試験の答案にコメントをつけて返すことも、参加型授業といえる。

Q:企業は大学での成績を重視していない。企業の視点をどう大学教育にとり入れるのか。

A:企業側もどういう能力が社会で役立つ力なのか、明確なものを持っているわけではない。社会で必要とされる能力は、大学が考えるべきもの。大学教育で培うものには、①専門職業的知識、②汎用知識能力、③自己認識・社会認識がある。①、②、③が互いに連携しひとつの能力として培われることが重要である。

【全体共有Ⅱ】（要約は人間発達科学部 川崎教授）

全体討議1を踏まえ各グループで「何ができるか」を検討しその内容について議論が行われた。概ねⅠの回答に沿った論点が絞られた①講義の資質を（方向性を踏まえて）いかに高めるか②卒後キャリアとの関連を考え学生の主体性や授業参加度をいかに高めるか、といった点に絞られて回答がなされた。全体討議Ⅰ、Ⅱともに議論の方向性があらかじめ規定されていたように感じられたためか、明日からできる具体的改善案、画期的な意見が多く供されるという状況とはならなかったが、卒後キャリアと授業との在り方については踏み込んだ議論がなされたように感じられる。講演者からは言及した結論方向性よりも参加者の視点を付与する方向性で回答がなされた。

1. 講義の資質に関する項目

現在の雇用形態の中でより高いキャリア形成を行うためには学生たちには「自分が何をしないといけないのか」ということを考える資質が格差社会流動社会を生き抜く上で必要となる。これを必然的に大学教育で育てることが求められる。専門職業知識だけでなく汎用知識能力の養成が重要といわれる。汎用知識能力の活用においては自己認識の活性化が重要になると考えられ、ひいては3層の相互関連性が重要となる。これらを授業として与える場合には一定の知識をネタにしてトップダウンで階層構造を構築することが望ましい。

2. 卒後教育との資質に関する項目（評価や卒後キャリアと成績）

評価の在り方については中教審でも厳しい評価を推奨している。私見としては参加的授業は成績が付けにくく推奨しない。成績は企業が何を求めているのかと成績に関連がない。企業では面接試験が重要であり、成長可能性をみる。専門職業知識と職務がリンクしていれば話は早いですが、結果としてどういった項目が卒後に有効であるのか検証されていない。大学で教えるべきことについて（「企業に役に立つことを教えるのか」等）大学が自分たちできめる必要がある。

【グループ討議の例】

※特に取りまとめを依頼していなかったが、理工学研究部（理学）若杉教授が自発的に担当のグループの討議概要をまとめてくれたので、グループ討議の例として採録する。他のグループにおいても同様に活発な討議がなされた。

《教員 E グループの討議内容》

グループディスカッションⅠでは、金子先生への質問を検討した。金子先生の講演の中で、大学教育の日本的特質として、三つのモデルを示して説明しておられたが、今後日本の大学がめざすのは、三つのモデルに照らした場合、どういった方向なのかという質問があがった。また、今後の大学教育の課題である自律学習の促進については、全学部に通じた課題であるが、学部の特徴により達成の手段は異なるという意見もでた。最終的に質問事項として取り上げたのは、自律学習の促進に有効な方法として金子先生の講演の中で取り上げられていた参加型学習についてだった。教員 E グループの中にも、少人数の参加型授業を行っている教員もいたため、参加型授業の有効性がどのように検証されているかに関心が集まり、そのことについて質問することとした。

グループディスカッションⅡでは、富山大学としてどう行動すべきかを検討した。具体的にどうすべきかは、学部ごとの違いがあるため、学部ごとで検討した方が有効という意見もあり、具体例を挙げるのは困難だった。議論の中で、学生が専門を活かして地域での行事に参加している事例が挙げられたことから、社会との関わりとのなかで学生が専門を学んでいることの意義を見出すことは重要と考えた。そこで、大学および学生と社会との関わりを重視して、社会へ学んでいることを発信するという趣旨の提案をすることとした。

参加者アンケート

問1 今回の企画の各パート及び全体について評価をしてください。

	良くなかった	あまり良くはなかった	どちらともいえない	おおむね良かった	良かった
1) 基調講演	1	2	3	4	5
2) グループ討論 1	1	2	3	4	5
3) 全体共有 1	1	2	3	4	5
4) グループ討論 2	1	2	3	4	5
5) 全体共有 2	1	2	3	4	5
6) 企画全体として	1	2	3	4	5

問2 今回の企画の特徴の1つとして、グループ討論を取り入れた点があります。このことがFDの企画として役に立ったと思いますか。

1) まったく役に立たなかった	2) あまり役に立たなかった
3) どちらともいえない	4) ある程度役に立った
5) とても役に立った	

問3 今回の企画の特徴の1つとして、教員だけでなく職員・学生が参加している点があります。このことがFDの企画として役に立ったと思いますか。

1) まったく役に立たなかった	2) あまり役に立たなかった
3) どちらともいえない	4) ある程度役に立った
5) とても役に立った	

【集計結果】

		良くなかった	あまり良くはなかった	どちらともいえない	概ね良かった	良かった	回答数
問1	基調講演		3%	8%	50%	39%	36
	グループ1	3%		12%	64%	21%	33
	全体共有1	3%	6%	18%	39%	33%	33
	グループ2	3%		22%	53%	22%	32
	全体共有2	3%		27%	40%	30%	30
	企画全体	3%	6%	9%	58%	24%	33
問2			3%	9%	52%	36%	33
問3			3%	30%	52%	25%	33

結びに代えて

本学では、各部局において活発にFD活動が展開されているが、それらとは別に、今年度から全学FDを再開した。昨年度から始動し始めた大学教育支援センターが、全学的見地から、富山大学構成員として大学教育に関する問題を共有し、本学の更なる発展を期すことを目的として再出発である。

FDは講演会スタイルが一般的であるが、この全学FDでは新たに3つの特徴を加えた。すなわち、

1. 討議型FD
2. 全構成員型FD
3. 楽しむFD

の3つである。単に話を聞くだけではなく、参加者全員が自分の疑問や考えを寄せ合い、活発に話し合うためのグループディスカッションがメインとした(特徴1)。また、教育は教員あるいは教員集団だけで成すものではなく、様々な場面で事務職員との協働・連携が不可欠である。一方、いくら教職員が望ましい教育を展開しようと思っても肝心の学生がそれに呼応しなければ効果が上がらない。この観点から、大学教育改善は教員、職員、学生が一緒になって進めるべきと考え、教員だけを対象とするのではなく、職員、学生の参加も積極的に促した(特徴2)。第3の特徴は「楽しむFD」である。多くの大学のFDは、固定観念にとらわれ、教育効果・効率の話に終始したり、授業方法論・技術論あるいは逆に教育哲学的な内容になったりしがちであるがFDはもっと自由なものである。明るい雰囲気ですぐ笑顔が溢れるものとして展開した方が主体的・積極的になれると考えられる。

当初の計画ではもう少し参加人数が多いことを期待したが、日程の制約もあり、やや小規模なものに終わったとはいえ、上記の3つの特徴を意識した新たなFDは確かな一歩を踏み出したと考えている。今後の発展に期待したい。

FDタスクチームの委員各位には、御多忙な中、実行委員として御尽力頂いたことを深く感謝したい。特に、慣れないファシリテーター役に戸惑われた面もあろうかと思うが、新たな自分の発見など、何かのお役に立てれば幸いである。また、学務グループの新井、三浦両氏にも本来はグループ討議に加わって頂きたかったが、二人には総務としての裏方に徹して頂き、全体の企画が非常にスムーズに進んだことを記して感謝の印に代えたい。

企画責任者

大学教育支援センター

橋本 勝

[付記]

学生たちの学びに対する意識を高めるため、本イベントとは別に、約1か月後の11月25日(日)に、人間発達科学部を会場に、学生参画型FDイベント(=UDトーク 2012)も開催し、約50名の学生・教員・職員・一般市民・他大学の教職員が参加し、大学に期待される人材育成の中身をテーマに活発な討議がなされた。

こちらには、私に加え、佐藤副センター長、学務グループの新井主査も教職員実行委員として参加したが、企画・準備の大半は学生たちが取り組んだだけに、一層、楽しむ要素が多い内容となった。そうした学生企画イベントが正式なSDと位置付けられたことは、大学教育関係者の間では「大学史に残る画期的なこと」と言われており、全学FDと並ぶ二大イベントとして次年度以降、富山大学の特徴に数えられるような発展を期待したい。